

「富溢るコリントス」再考

キャサリン=モーガン／訳：佐藤 昇

本稿は、2004年3月19日に東京大学において行われたキャサリン=モーガン博士 Dr. Catherine Morgan による講演の翻訳である。モーガンは初期鉄器時代および前古典期のギリシア考古学を専門とし、考古学から見た古代ギリシアの宗教、そして近年では殊に、考古学的見地から、前古典期以前のギリシア世界における社会の形成とアイデンティティの関わりに関心が及んでいる。著書に *Athletes & Oracles: the Transformation of Olympia & Delphi in the 8th century BC*, Cambridge, 1990、*Isthmia VIII: the Mycenaean Settlement and Early Iron Age Sanctuary*, Princeton, 1999、*Early Greek States beyond the Polis*, London, 2004 がある。現在はロンドン大学キングス・カレッジ古典学部にて教鞭を執る。本講演では、彼女が博士論文以来関わってきたコリントスについて、その経済活動のあり方が、近年の考古学的研究の進展を踏まえ、長期的な視野から検討された。なお、講演は長時間に及び、また数多くのスライドを利用したものであったため、翻訳掲載に当たり、本人と訳者とで協議し、適宜修正を加えた。

初期の詩人や歴史家のおかげで、コリントスについては何より、それが豊かであったことが現代の私たちにも知られています(図1)。現地に行ってもなかなかそうした状況を窺わせるものは見つけ出すことは難しいですし、またコリントスそのものよりも遥かに豊かな西方植民都市と比較してみますと、全くもって焦れたくも感じてしまうようなものなのですが、富溢れるコリントスのイメージは根強く、失われることはありませんでした。では初期コリントスの富が実際には何処にあったのか、かねてよりしばしばこうした疑問が提出されてきましたが、近年重要な研究が次々と公開されるに及び、その蓄積から言っても、再びこの同じ問いに立ち返ることは無駄ではないでしょう。クリストファ=ファフ Christopher Pfaff による、コリントス地方に於ける2柱の女神デメテルとコレの神域研究、前古典期に於ける建築の研究、ナンシー=ブキディス Nancy Bookidis によるコリントス出土の彫像に関する研究、そしてブキディスとロン=ストロウド Ron Straud によるデメテルとコレの聖域研究、キース=ディッキー Keith Dickey による葬制研究、ブランシュ=メナディエ Blanche Menadier によるコリントス近郊のペラコラ遺跡に関する研究、そしてコリントス地方の重要な聖域であるイストミアに関する拙著、現在進行中の調査を除いても、枚挙に暇がありません。とは言え、今回のテーマ設定にあたっては、ベツィ=ペンバートン Betsy Pemberton による古典期及びヘレニズム時代のコリントスを扱った研究に直接的な刺戟を受けました。これはトレンダル記念講演にて彼女が報告したもので、*Proceedings of the Australian Academy* に掲載されております。コリントスに於ける考古史料からは、全盛期である6世紀以降、壮麗な公共建築の存在を伝えるような遺構が比較的稀であったということ、そして5世紀末から4世紀にかけては明らかに、近隣のネメアやエピダウロスといった国々が壮麗な神殿建築を志向していたのと比べて、南ストアに見られるような実利的建築が志向されていたことが示されています。こうした状況の中、コリントスの伝説的富を探し求めてペンバートンは、市民の誇りを壮麗に顕示するものよりも、織物や葡萄酒、宝飾品、小さな金属細工といった、生活を快適にしたり、或いは死後の世界を満ち足りたものにしてくれる、そういった消費財の

存在を示す豊富な史料群に目を向けました。

勿論、5世紀末以降コリントス地方に於いて公共建築活動が衰退していくことについても、近隣諸市とは建築計画に大きな相違があることについても、明白な理由があります。コリントスはペロポネソス戦争及びコリントス戦争を通じて恐ろしい政治判断ミスを犯し続けてきました：コリントスは、スパルタを頼みにする余り、コリントス湾岸地域の自国権益を頑として保持し続けようと躍起になってしまったのです。コリントスはもはやこの地域の新たな親アテナイ勢力と競合することができず、イオニア諸島や北西ギリシア諸国へと勢力バランスが徐々に、しかしながら容赦なく傾いていくのをどうすることもできませんでした。にも拘らず、コリントスはその失敗が如何なるもので、どれだけの損失をもたらすものであったのか、顧みようとするとはなかったのです。392年には、敵軍が領土を荒らし、内乱まで発生するに至ったコリントスですが、それより遙か前に既に、敗戦を繰り返していたことは勿論、これに加えて資源利用の道も途絶えていったことにより、大きな経済的損失を被っていたのは明らかです：433年、コリントスはペロポネソス海軍に90艘の軍船を参軍させましたが、410年には15艘を抛出するのが精一杯でした。ことによると、コリントスはこれよりずっと前から軍事的資質に欠けていたのでしょう。5世紀始め、アルゴスはオリュンピアにコリントスから奪った武具を奉納しています（その戦闘を伝える史料は他にありませんが、両国は常にクレオナイやミュケナイを巡って緊張関係にありました）。またトゥキュディデスは、最年長の者たちや最年少の者たちによって構成されたアテナイの即席部隊を前に、コリントスがメガラを堅持することができず、本国の老人たちに大変な不興を買った、と伝えていません。実際コリントスは、対ペルシア戦争の勝利を記念してデルフォイに奉獻された「蛇の柱」に刻まれているギリシア連合国の中で第3の地位を占めている訳ですが、その理由もコリントスがプラタイアの戦いに派遣した部隊が大人数だったから、ただそれだけなのではないかと考えたくありません。ヘロドトスがコリントスの戦場でののはたらき振りをさんざんに貶しているのに対して、シモニデスはこれを賞賛しており、著しい対照をみせている訳ですが、これは単に同じ出来事を異なる側面から描いただけなのかも知れません。視点の問題や或いはパトロン関係の問題でしょうか。5世紀はほぼ全般的に、コリントスには収入源も十分あり（そのかなりの部分は西方ギリシア世界やカルタゴとの貿易に由来するものなのですけれど）、「外交資本」とでも呼ぶべき、外交面で活かすことのできる実績も備えており、こうした軍事的脆弱性を補い、汎ギリシア的祭典の1つであるイストミア競技祭の管轄といったような、いわば「財産」を利用することができたのです。しかしやがて、命運尽き、コリントスは収入源を失い、激動の国際情勢の中で、コリントスの文化資本もその価値を減じていったのです。コリントス周辺の小都市、エピダウロス、フリウス、（ネメアを擁する）クレオナイは、勢力図の書き換えから利を得、大規模建築計画を開始します。ネメアとエピダウロスの呼び物は、その形状からオリュンピアを思わせるような壮麗な競技施設群です。このようにして、これらの諸都市は、旧来からある国際的競技祭の為の建造物群を利用し、これを軸に各々新たな自己主張をし始めたのです。後から考えてみれば、既に信用も失墜していたコリントスにはもはや明らかにこうした競合に参加する力は残されていませんでした。もっとも、390年の大火の後、イストミア神殿再建には凡そ1世紀もの時間がかかってしま

ったとは言え、コリントス自身がこうした状況を認識していたかどうかは分かりません。しかし4世紀半ば、コリントスは、厄介な合従連衡には手を出さずに、徐々に勢力を盛りかえします。ティモレオンがカルタゴ軍を撃破するに至ると、都市中心部にある競技場脇には巨大な4頭立て戦車記念碑が設置され、イストミアにカルタゴ軍から奪取した武具が奉納されるまでになりました。しかしこの時、おそらく外交の結果手にした援助にも支えられてのことでしょう、コリントスが始めに着手した公共建築事業は商業施設、南ストアの建設であり、宗教施設ではありませんでした。

このように、ペンバートの発見は一面では殆ど驚くに値するようなものではありません。しかしながら彼女は、華美贅沢とは言わないにせよ、快適な私生活という点を強調しております。これは一見、初期コリントスの富の性格について私たちが抱いている認識とは著しい対照を為しているように思われます。とりわけ、8、7世紀にはコリントスは精力的な商業都市として、芸術や建築の面でも最先端を進み、植民活動でも指導的地位にあった、こうしたイメージとは非常に対照的です。それではこうした対照性はどれほど事実に沿ったものなのでしょう？私はこの点に対して、否定的な見解を持っています。5世紀末から4世紀に関する状況は、都市コリントスが資金投下に関する態度を変化させたというよりも、長期に亘って保持されてきた価値観を継続していたのだと考えています。まず第1に、何より、8世紀から7世紀始めにかけてコリントスが享受していた商業利益を考える際、手掛かりとなりかつ十分確証されていると言える史料は、少なくともある程度の規模を備えているということになれば、どんなに早くとも7世紀の末の数十年にしか遡りません。そのときもごく一時的なものに限られています。確かに史料上の問題がある可能性もあるでしょう。発掘や保存につきまとう偶然性などの問題は当然ですし、またコリントスはギリシア本土の諸都市の中でも最も綿密に発掘された遺構の1つである上に近代建築が割合少ないではありませんが、それでもコリントス遺構は広範な領域に跨がるものであり、万遍なく均等に情報が得られている訳ではありません。とは言え、先に述べたような傾向は多くの主要地域に於いて顕著であり、この点はコリントスも、アテナイ、アルゴス、スパルタといった他のギリシア本土と一致しているのです。

例えば、ギリシア時代のアゴラの位置はまだ確定されていないもの（おそらく神殿の北側の現代では駐車場になっているところか、あるいは近接する現代の広場にあると考えられますが）、クリストファ=ファフの研究は、6世紀を通じて、都市の中心域のみならずコリントス領全域に亘って記念的大規模建築が発展していたことに光を当てています（図2）。今回私は、それ以前の集落に関する性質と形態について議論しようと思っておりますが、とりあえずここでは、6世紀の建築（とりわけ宗教建築）が量的にも、多様性の面でも、相当の域に達しており、時にその後の選択的建築計画に於いてもこれと同等のものが現れることはあるにせよ、ローマ時代に至るまで規模の点では比肩するものが出現することはなかった、この点のみを強調しておきたいと思っております。最盛期の6世紀を過ぎてコリントスが建築計画において如何なる選択を為していたのか、この点を最も端的に示しているのが、470-450年の火災で焼け落ちたポセイドン第1神殿を擁するイストミアです（図3）。整地と再建こそ羅災後即座に着手されたかもしれませんが、新神殿完成を見るのは5世紀末を待たねばならず、390年には再び火災に遭い、今回は4

世紀の終わりまで再建を示す史料は殆ど見当たりません（時折、建設用石材などの重い資材を搬入していたようでありまして、これは北東神域へと続く主要参道が消耗と補修を繰り返していたことから明らかなのですが）。言い換えますと、凡そ150年の間に、コリントス地方では随一の汎ギリシア的競技会の会場でもあったこの神殿は、僅か20年程しか機能していなかったとも言えるかもしれないのです。このことは如何なる意味を持っていたのでしょうか。まず、殊に前古典期の神殿が主として、実に様々なものをストックする空間として利用されていたことは明らかです。神域でストックされていた物品は、オリーブ油から、葡萄酒、什器、そして「宝物」（貨幣、高価な奉納品、裁断されて再利用に供される古い奉納品などの金属類）にまで至り、更には、禿げた鍍金を修繕する為の金属素材もストックされていました。このような空間が失われてしまえば、実際に現実的な変化に対応する必要はあったでしょう。しかしながらこうした状況が及ぼす影響よりもむしろ、象徴としての神殿が失われたことの方が深刻な影響を及ぼしたのではないかと想像されます。最初の羅災の後、焼跡は極めて迅速に整地されましたが、最も力を注がれたのは、神殿自体の再建よりもむしろ、祭壇付近の集会場エリアと参道の拡張でした。これには羅災後の残存物が上手く使われました。この火災は、6世紀後半の大規模建築事業の直後にコリントスを襲いましたが、それは丁度アクロコリントスのデメテルとコレの神域大拡張期に当たっていましたので（この点は後に触れます）、おそらくまずは何らかの経済措置をとらねばならなかったと考えられます。しかし390年の火災発生後、大幅に再建が遅れたことは、それだけでは説明が付きません：コリントスは4世紀後半中立を守っており、私人墓の様子から見ても個々の富はそれなりに蓄積されていたと言えますし、また後代の状況から遡求して推測すれば、コリントスがもはやイストミア管轄国としての地位を利用できない状態になっていたようにも思われるのですが、しかしコリントス周辺の諸国は実際に各々の神域を発展させ続けていた訳ですし、汎ギリシア聖域であり続けたイストミアは資金調達を可能にしてくれるものだったに違いありません。

対案として、以下のように考えたいと思います。コリントスの6世紀ルネサンス自体は重要な時代現象として捉えられるべきではありますが、こちらの方が例外的であり、公共建築に対して資金を投下する際、概してコリントスはそれほど積極盛んに推進せずにいる傾向にあったのではないかと、このように考えてみたいと思います。建築にばかり資金投下がなされた訳ではなかったのです。コリントスでも7世紀末頃には石像やテラコッタ像などによる記念的彫像が製作され始めましたが、凡そ560年頃までは極めて稀でした。もっともこの時代状況はスパルタ、アルカディア、アテナイなど近隣諸地域と似通ったものだったと言えるでしょう。しかしながら、コリントスでは、墓碑や建築装飾よりもむしろ奉納品に焦点が当てられており、この点はこの地域の特徴と言えるでしょう。西方ギリシア、殊にコルフの、所謂「コリントス化」様式から脱却した新たな展開も顕著に見られます（どちらが先行していたのかという問題は、当面解決はつきませんが、面白いと思います。もっとも私自身は西方ギリシア世界側の方が革新的であったと捉えたいと考えてはいるのですが）。また、6世紀以前のコリントスの交易を議論するに際して私たちが大きく依拠している、精製土器に関して言えば、輸出量、輸出範囲の大幅な拡大が認められます。出土する陶製品は過渡期のものから、より後の時代のもの

まで、地域的にはアナトリアからエトルリアに及び、北はマケドニアや黒海沿岸地域、南は北アフリカまで、広範に分布しており、西地中海でも発掘されております。とりわけコルフやタレントウムなど、多くの西側の中心的な都市に於いては、コリントス様式を忠実に模倣生産されたものも、コリントス産の陶器とともに出土しております。精製土器に関して言えば、こうした拡大は短い期間に限定された現象であると言えますが、輸送用アンフォラやモルタリウムといったその他の陶器貿易の方は5世紀を通じて成長し続けました。

これらは皆、コリントスにおける陶工地区の発展に関して現在私たちが理解しているところに見事に合致します。この区域に於いて最初期の陶器生産を確実に示す遺物は市壁建設と同時代のものであり、早くも7世紀の第三四半世紀にあたります。これと同時期か、或いは直後位に、おそらく工房や住居としての機能を兼ね備えたと考えられている2つの東西に細長く伸びる建築物が建設されました。ちなみに、この遺跡の発掘者であるアグネス=スティルウェル Agnes Stillwell は、当初、発掘報告に於いて8世紀の生産を示す遺物を発見したと主張していましたが、これを公表することなく他界され、現在私たちがコリントスの収蔵室で確認できる最初期の廃棄物は7世紀後半のものに違いありません。8世紀に関しては、ある墓域の一部（ほとんどが子供の墓しか見つからない為そう考えられています）と、おそらく関係のあった集落から持ち込まれたと思われる陶片があるのみです。しかしこの遺構はまだまだ多くの疑問点を残しています。間違いなく大部分が失われてしまったのでしようけれども、地表からごく浅い所にあるにも拘らず、地表面には殆ど何も見えるものがないのです。

勿論南ギリシアポリス一般に関して、6世紀という時代を、発展の画期として強調することは、さほど目新しい視角ではありません。しかしながらその一方で、コリントス地方に於けるこうした発展には、この地域に特有の、長期に亘る経済的背景があるのです。例えば、クリストファ=ヘイワード Christopher Hayward が現在取り組んでいる研究によれば、石材の切り出しや輸出はコリントスの基幹産業の1つになっていきます。マヴロスピリエス、ケンクレアイ、エクサミア、そしてコリントス市中心などに位置する数多くの石切り場から魚卵状石灰岩が生産され、コリントスにおける事実上殆どの公共建築に利用され、コリントス地方以外では6世紀以降のデルフォイ、4世紀のエピダウロスに於いて使用されました。この石材がこれ以前にも使用されていたことは確かです。石棺に使用されていた例などは、コリントス市東南に位置するパナギアで近年発見された見事な例が示しているように、最初期のものでは初期幾何学紋様期にまで遡るようです。750年頃からはこの石棺が一般的な埋葬形態となっていきました。魚卵状石灰岩はコリントス及びイストミアに於いて7世紀の神殿建築にも用いられましたが、大規模な石材の採掘は当然、国内外の建築の進み具合やその建築物の性格によって左右されるものでした。ヘイワードが控えめに主張する所では、紀元前7世紀から紀元後4世紀にかけて採掘された魚卵状石灰岩の総量は少なくとも2,000,000立方メートルになり、他種の石灰岩も含めれば3,500,000立方メートルに達するとのこと。エクサミアの削岩跡を見ても分かるように（図4）、石切り場自体印象的なモニュメントですし、石切り場の所有権や、道路、人力、輸送船舶といった生産を支える基盤、そして勿論収益の面から考えても、この石材採掘の規模が持つ意味は量り知れません。

このように概観してみただけでも、後代の諸史料や植民に関する現代の研究者の憶測を基にして8、7世紀のコリントスを推論することは、時に無自覚なままに為されることすらあるのですが、これには幾つもの問題があることが容易に理解できます。実際、コリントス、そしてコリントスが商業を通じて富を獲得していたことを、ヘロドトスやトゥキュディデスが賞賛していたとは言え、それも6世紀から5世紀始めにかけての情報に基づいて為されたものであることは確実ですし、ホメロスの叙事詩の中でコリントスに添えられる形容句が豊かさを感じさせる響きを持っているのは、交易によって獲得した財や物質的富よりもむしろ、豊富な自然の資源に恵まれていることと関わりがあるのかも知れません。それではコリントスの富は何処に求められるべきなのでしょう。ここで、先程指摘しましたように、初期コリントスの富の形成について、私たちが如何に精製土器の頒布、とりわけ西方への輸出に拠ってイメージを形成しているのか、この点に立ち戻りたいと思います。勿論だからといって、ここでこれまでの諸説を捨て去るべきであると言っているわけではありません。しかし、コリントス地方及び西方（イタカのエトス、ピテクサイ、シュラクサイ、そしてサレント、殊にオトラント）に於いて数多くの遺構から新たな史料が発見され、或いは既存の史料が再評価されてきておりますし、またコリントス湾周辺の諸共同体が早い時期から活発で複雑な活動を見せていたことが次第に分かってきておりますので、これらの諸点に照らして既存の諸議論が修正を加えられるべきであることだけは強調しておきたいと思います。

コリントス地方に於いても、数多くの遺構で初期段階での活動が確認され、イストミア聖域では初期鉄器時代の土器の編年が例外的に完全に把握でき、アクロコリントスのデメテルとコレの神域では集落跡（そしてやや時代が下った神殿跡）が確認されていることから、都市部に数多く残る既知の墓や井戸の遺構とこれらを補完的に史料として利用することができます。もはやコリントス式土器の編年を西方の遺物からの類推に頼って推測する必要はないのです。またこのことによって、とりわけ後期幾何学紋様期に於いて、地元では土器の器形のレパートリーが豊富にあったこと、これに比べ西方には、主にオイノコエ、スキュフォス、コテュレ、続いてアリュパッロスといった、比較的限られた種類の土器しか輸出されていなかったことが明らかになりました。例えば、イストミア出土の土器のレパートリーの中には、明らかに外部から着想を得たと思われる、実験的な、口縁部の開いた器形を持つものが数多く見られます。またこれらのペラコラ及びイストミアにて発見された皿の様式は直接的にはイタカ地域独自のものに由来するものであり、元を辿ればフェニキアのものに辿り着くことになります。その間に相当の変更が加えられてはいますけれど、本来食事用であった皿が、コリントスではほぼ神域においてしか発見されず、おそらく奉納品として用いられたようです。しかしながら、驚くべきことに、デルフォイを除き、こうした実験的な土器はコリントス地方の外では殆ど見出すことができないのです。このように、市場毎に「消費」される土器の形態が異なることが分かります。これは、土器制作にあたってどのような技法がコリントスの側で利用できるのか、西方の消費者の方にはどのようなニーズがあるのか、こういった相互に密接に関連しあう要素から生まれた状況であると言えるでしょう。海上輸送に携わる人々の出自は到底確定することなどかないませんが、コリントス人がおそらく関わっていたであろうことを示唆する史料があることは指摘できますし、推論であること

を承知で取えて言えば、土器に付された印に関するアラン=ジョンストン Alan Johnston の研究によると、海外で発見された前古典期のコリントス様式の容器には、比較的高い確率でコリントス印を認めることができるということです。

補足的にはありますが、人物図像の性格や目的に関しても違いを認めることができます。ここでは、コリントスの図像様式と、これまで長い間、コリントス様式の西方ギリシアに於ける模倣、派生的様式と考えられてきた、イタカの図像との違いに目を向けてみましょう。コリントス式の図像自体アッティカの「ディピュロン」グループから派生したもので、これはデルフォイ出土のコリントス式容器に描かれた戦士像に見て取ることができます。1つ、2つばかり、船の図像が描かれたものがあり、ここに僅かながらコリントスの海上活動を垣間見することもできますが、ことさらにピテクサイなどのエウボイア人系西方植民市の陶器画に見い出されるような航海譚図像に比肩するようなものはありません。実際、概してコリントス様式の図像の中には、私たちがコリントス人にとって関心の的であったろうと考えるような活動に関わる描写は、ごく稀にしか現れてきません。この点は強調すべき点でしょう。さほど多くない宗教活動に関わる図像が、コリントスの諸神域間のネットワークが豊かで複雑であった6世紀に集中していることがこれを裏打ちしています。更に興味深い例外事例は、それほど多くはない、8世紀末以降の図像グループです(図6)。これらの形状はアッティカ式からの派生なのですが、タイプも明確に分類できるものではなく、集積してきた経緯も特殊なものです。例えば、コリントス様式のスキュフォス C66 216 には、枝を持つ人物像とその2身融合体の人物像とが繰り返し併置されて描かれています。これなどは何か、脇役の方が主人公の地位を示すシニフィエとしての役割を果たす一種の物語装置と言えるかも知れません。明確な証拠が十分に揃っている訳ではありませんが、このようにして図像を、視覚的に意味やコンテキストを想起させる記号シニフィエとして使用することは、J. L. ベンソン J. L. Benson によれば後期コリントス様式の図像に特徴的とのことですが、コリントス様式の人物図像描写の最初期に遡ることができることを示唆する資料も僅かながらあると言えます。とは言え、これはコリントス様式の中では極めて特異な例であると言えます：管見の限り、デルフォイ以西出土のコリントスの幾何学紋様期の土器には人物像を描いたものは1つもありません。

イタカ様式の図像は全く異なります：ピテクサイより出土した輸入品1例を除いて、人物像が描かれた陶器は全てエトスの聖域から出土したもので、多くは、おそらく儀礼上重要な意味のある、各々異なった器形をしています。まずはピテクサイのサン=モンターノにある第946墓から発見された輸出品である、カンタロスから見ていきましょう(図6)。これは器形、胎土から言って明らかにイタカ産で、同墓から出土した他の副葬品からはほぼ確実に8世紀の第3四半世紀に位置付けられます。表面は酷く摩滅していますが、両面に付された同じ戦車行進の装飾は判別可能です。戦車はギリシア本土に於いて馴染み深い主題ですが、その造型手法は紛れもなくイタカ式で、殊に馬の腹部が下がり気味な所などは、子供向けのポニーを思わせ、貴族の地位を表彰したものという感じはあまりしません。車輪が単純化され1輪しか見えないところや、御者の中に鳥のような頭をしている者が描写されている所なども同時代のギリシア陶器に見い出すことはできず、むしろ、当時ラティウム地方南部にまで広がっていた「ハルシュタットの鳥車」

を思い起こさせます。戦車を主題に選んだのはピテクサイのパトロンへの配慮でしょう。このカンタロスは、ピテクサイの対岸に位置するポンテカニャノにある墓から発見された最初の原寸大戦車に僅かに先行する時代のものです。しかしイタカにしてみれば、ホメロスに「ここは岩が多く、馬を駆るには不向きである（『オデュッセイア』第13歌243行、松平千秋訳）」と謳われているのですから、なんだか皮肉と言えるかも知れません。次に例として挙げますエトス出土の陶器には、イタリアとの結びつき、東西の図像の混交を認めることができます。エトス600(図7)には、明らかに屋根瓦が描写されており、これらの屋根瓦はイストミアやコリントスなどのギリシア本土に於ける青銅器時代直後の瓦屋根と必然的に関係してきます。この土器は、その屋根瓦描写から、長い間、建築物の図像と捉えられ、初期の建築を描いた重要な記録として引用されていました。しかしながら実際にはその屋根は人物像が描かれた土器片と同じ土器のものではなく(単独で年代確定をすることもできません)、2つの「まぐさ」と「敷き居」が描かれた土器片も1つのカンタロスを構成するものではないでしょう。人物が描かれた残り4つの土器片は8世紀末の容器で、土器片の内面が調整されていない、口縁部が狭まった器形のもので、おそらく箱だと考えられます。取り立てて建築に関わる特徴は認められず、パネルの間に一定の間隔を於いて繰り返す窪みは、木箱を装飾するのに用いられた、打ち出し紋様の施された細い金板の分割線を思い起こさせます。精巧な奉納品ではないかと考えています。図像に関しても、イタカ式をコリントス式と見ていた人たちにとっては驚くべきものを含んでいます(図8)。1面の保存状態が最も良い人物像は、片鞍乗りをした男性騎手像です。片鞍乗りの騎手は古代ギリシア世界では数少なく、ほぼ常に女性像であり、東方化様式の幾つかに由来するものばかりです。男性像はキュプロスや中東に見られるようです。鞍や足掛けの精巧な造型や大きさは中東のエリート若しくは馬上の神を想起させます。箱正面の壁板には長い外衣を纏った男性像が対峙しており、「リュラ奏者印」に見られる図像にやや類似していますが、レフカンディのトゥンバー内にある墓から見つかった織物の長外衣を思い起こさせ、さらにはアッシリアの宮中礼装により類似していると言えます。頭髪、すなわち兜の前立てか若しくは髪型の重要性を推測する人もあるかも知れません。これら2例から分かりますようにイタカの人物像は高度に儀礼化しており、視覚的要素に関する様々の伝統を混交し、利用しておりまして、コリントスのものに関して私たちが知っている状況とは懸け離れているのです。

このイタカの例は、より広い問題点、すなわち、イオニア諸島が特にコリントスの陶器輸出に関する私たちの理解を非常に複雑なものにしている、という点に繋がります。イタカのような島では、生存していく為にも航海する必要がある者もいたでしょうから、物質文化の中に様々な海外とのつながりが現れていてもさして驚くようなことではありません。イタリアとの関係は明白です：ピテクサイや近隣の対岸地域、クマエ、ポンテカニャノ、サルノ溪谷には数多くのイタカからの輸入品が見つかっています。西ペロポネソス、中央ギリシアとの関係も次第に明らかになってきます。ナンシー=シメオノグル Nancy Symeonoglou がエトス中央部の建築の歴史を評価し直してくれたおかげで、ここには10世紀以来、ニコリアのユニットIV-1と類似した、細長い家屋建築が存在していたことが分かかってきてまして、どうも、エトスは、ニコリア同様に、アレクサンダー=マザラキス=アイニアン Alexander Mazarakis Ainian が提唱しているモデルに合致してい

るようです。つまり、支配者の住居が祭祀センターにして神殿の原形であったと考えられるようなのです。次第に、重要な遺構、例えばオリュンピア、デルフォイ集落、アカイア湾岸のアイギオンとその内陸アノ=マザラキにある神殿、こうした遺跡の状況についての考古学的情報、取り分け土器のデータが蓄積されてくるにつれ、コリントス湾が長距離に亘る地域交易ネットワークを結節する海上交通路として機能していたことが明らかになってきました。イタカはその一方の端にあたり、イタリアとエピルスを経由するルートに位置していました。もう一方の端にあたるのがコリントスで、2つの海に結びつき、同時に陸上交通に関してもペロポネソスやアッティカと道路で結ばれていました。このことはトゥキュディデスが後に強調することになります(図9、10)。コリントスが海上で卓越した勢力を振るい、早くも8世紀には西方への海上路を制することができたという古いイメージは余りにナイーブに過ぎるでしょう。

このように、8、7世紀を通じてコリントスがイタリアとどのように、如何なる目的で、そしてどの程度結びついていたかを考えるに際して、イタカは重要な要素であると言えます。植民活動を開始する以前のコリントスの対外行動を再構成する場合、大抵は、限定的な種類の飲酒、灌漑用の容器が議論の根拠となる史料として用いられてきました。とりわけ800年頃以降のアプーリア出土のものや、8世紀中葉以降のナポリ湾周辺およびシチリア出土のものが好んで利用されてきました。これらの幾つかが本当のコリントス産である可能性は十分にあるでしょう、タプソスの輸出品として知られているものは、例えば、大部分が確かにコリントスで製作されたものです。アカイア産の可能性も認めてはおりますけれど。しかしコリントス産輸出品と考えられているものの内実際にコリントス産であるものはどの程度あるのでしょうか？この問題に解答することは、近接した地域では相似した様式の土器が生産されることを考えると、より困難なものになっています。これはコルフの例に顕著に現れています。コルフでは植民当初から、多かれ少なかれ「コリントス化」した様式の容器が出現しています。結局コリントス植民市と呼ばれるところで早い段階に於いて様式上の類似が見られても驚くには値しません：しかし、非常に難しいことですが、1世紀後、コルフではコリントスの「移行期 Transitional」様式の忠実な模倣品、とりわけその様式のアラバストロンが製作されはじめるのです。これらは明らかにこの地域の好みにあっていたのでしょうか。コルフの墓域にはこの種のアラバストロンがごろごろしているのです。しかしそれらは広範に輸出されてもおり、コルフの陶工が意図的にコリントス市場を狙っていたと考えたくもなります。胎土分析の為に記載岩石学や化学分析の結果が相当に蓄積されてきた結果、今ではコルフと、他のイオニア諸島、そしてコリントスの胎土を判別することができる程になりました。焼成された胎土について詳細な情報が記述されている地域に関していえば、かなりの割合でその違いを識別することは可能なのですが(実際には最近まで多くの報告がこのようなことをせずにきた訳ですが)、当然多くの地域がまだまだ不明のままであって、仕上げまで施された完形を保っている陶器などはほぼ同一のものに見えるものもあるのです。

イタカについては、エトスがコリントス植民都市ではありませんから、事態はいっそう複雑です。しかしともかく8世紀の早い段階でコリントス様式を模倣しようという陶工集団のコミュニティが確立していたようで、これは大凡コリントス産土器が西方へと到達し始めた時代に相当します。当初から、コリントス産として報告されていたエトス

出土の土器が、大部分地元産のものであることは明らかでした。実際、マルティン=ロバートソン Martin Robertson は 1948 年の *Annual of the British School at Athens* の報告に於いて、「コリントス」胎土と称して、これに関するある調査、今日我々が焼成実験と呼んでいる調査を行っていました。しかしながら 2 つの地域における素材を扱うことによって、両地域の興味深い差異に焦点を当てることができます：イタカの胎土は常に柔らかく、釉薬を塗る際には細い筆が用いられていました。胎土に混ぜ込む混和剤は様々ですが、大抵わずかながら雲母が検出されます（コリントス産のものに雲母が含まれることはありません）。そして重要な点は、両地域に共通してみられる形態の容器の器形が異なるのです。例えば、エトスのものは胴部から頸部につながる部分が細く、滑らかに整形されておりますが、これに対してコリントス産のものは、極めて厚く、粗く作られています。こうした違いは、それぞれの陶工コミュニティが各々陶器作成過程をどのようなものと捉えていたのか、その在り方を明らかにしてくれるものであり、更にこの点がある程度の種類の陶器に関して調査されれば、容器の破損の仕方に応じて、陶片群を識別、分類する希望が出て来るでしょう。更にナンシー=シメオノグルが研究したエトスの陶工印は、コリントスのものとは形態の上でも異なり、また物理的に押印したものは 1 つもなく、全て筆によるサインである点でも大きく異なります。コリントスでは様々な素材の印章を用いておりますし、筆によるサインも利用しています。エトス印はイタカ以外でも、ペラコラとヴィツァで発見されています。こうした文化的差異は判別するに最良の手立てかも知れませんが、描写をより正確にする為にはさらなる研究を積み重ねる必要があります。しかしそれには資料的にも相当の質が求められますから、結局、考古学者が、輸入品である土器の中で、大量の、しかも磨耗した陶片を前にして、その出所を追跡しようと奮闘している状況に於いては、殆ど役に立たないのかもしれない。幾つかの問題に関しては、正確な出所を確定する必要はありません。例えば、メサピア、チュレニア海岸の諸都市、クレタ、或いはキュプロスの人々が、コリントス様式の壺を欲しがったのか、こうした消費者の志向を理解しようとするに際してはコリントス、或いはエトス、若しくは（ナポリ湾周辺で大量の地元産の壺が製作されていたことを考え）その他の何処で製作されたか否か、コリントス産か、地元産かはあまり問題ではないでしょう。しかし実際コリントスが 8 世紀の間対外的に自国の利益を追求していたことは確実だと言える訳ですが、その一方で、土器を通してコリントスの東西への関わり合いを分析しようとしても、確実な結論を出すとするれば、土器の広範な分布は複数の生産地において制作、輸出されていた結果生じた現象であると言えないうのです。

しかしながら 1 つ重要な例外があります。器形的には貯蔵用の瓶、或いは初期のアンフォラに分類されるものの 1 種が、8 世紀前半よりオトラントやシュラクサイで確認されているのです（管見の限りエトスやナポリ湾では確認されておりません）。コリントス式アンフォラ A が初期鉄器時代の粗製瓶から 7 世紀早々に発展していった様子に関しては詳細な研究が為されています：特徴的な先端部分は、貯蔵のみならず輸送を意識して形作られたものです。上述の初期の瓶がコリントス A の祖型であるのか、それとも同時代の貯蔵瓶の変種なのかは、問題ではありません：これは、商品として海上輸送されるものが存在していたという事を示唆しているおり、ということは、コリントスに於ける葡萄酒及びオリーブ油生産にも関わってきます。また、それらを海上輸送するに際して、

現実的な対応を為そうという関心を彼等古代人が抱いていたという事も指摘できます。これらやSOSタイプなど、特徴的なアンフォラ生産をもって、コリントスは、レスボスと並んで、アンフォラ発展の最先端を走っておりまして、これにアテナイが急速に追い付いていくという訳です。オトラントでは、その種のアンフォラがコリントス式の（幾つかの例外を除いてこれらは実際のコリントス産のものです）良質な飲酒、注酒用の什器と共に発見されました。更に北方ではデヴォル式土器と共に発見されましたが、この世紀の半ばまで、エウボイア式、アッティカー-キュクラデス式アンフォラなど、ギリシアの他地域で製作された什器がこの地域に於いて発見されることはありません。オトラントの集落に於いてこうした輸入品がほぼ2ヶ所に限定的にあらわれることに関しては、それらの利用に何らかの統制があったことが窺われますし、そしてその土器の種類などからは、葡萄酒及び酒器を輸入して、饗宴シュンボシオンのために格別の準備をしていた様子を思い浮かべることができます。ついで後期幾何学紋様期になると、ヴァステ及びキャヴァッリーノといった、2番手、3番手の集積地に於いてもほぼ同様のコリントス陶器の集積が見られるようになりますが、これはオトラントに1度集積したものが、更にそこから広まっていったものと言えるでしょうし、さらにここではメサピア人と同様の消費志向があったことが指摘できます。僅かばかり認められる、コリントス産ではない、コリントス化様式の陶器は、目と鼻の先にあるイタカから輸入されたものかも知れません。しかし、アンフォラの方は、明らかに直接的な結びつきを現しているでしょう。先に見たようなアンフォラの集積は、これまでのところ、アルバニア沿岸部、コルフ、イタカ、エピルス、及びコリントス湾沿いでは発見されていないのです。もしも直接的関係があったとするならば、コリントスは相当数の容器に商品を詰め込んで市場へと送りだしていた、という事になり、少なくとも市場のニーズに対応することが可能であったのでしょ、またおそらくそれを特定することもできたのでしょ。しかし目下、こうした活動の規模についてははっきりしません。ですから、今のところ、この直接交易がコリントスの陶器生産及び輸出と如何に関わっていたのか、特定の海上輸送業者を必要としていたのか、土器と農業生産の関わりは如何なるものであったのか、といった幾つかの重要な問題を提示するにとどめざるを得ません。

これまで示してきましたように、8及び7世紀始めにコリントスが西方と如何に関わったか、この点を再構成するのは至難の業と言えます。交易を通じての接触が植民活動を促したなどと単純化してしまうと、複雑なネットワークを見過ごしてしまうことになります。コリントス製品が流通していたネットワークは、アカイア、イタカ、メサピアといった、必ずしも直接的に有利な条件を備えている訳ではない、近隣の諸地域も含まれるのです。実際、交易商、手工業者、植民者、その他諸々の人口移動の様子は、ほぼ同じ軌跡を描いているようなのです。しかしもしも西方ギリシアが所謂「富溢るコリントス」を見い出すのにあまり有益な情報を提供してくれないとすれば、コリントス地方そのものはどうでしょうか？コリントスではどのような所に富の痕跡を認めることができるでしょうか？唯一、イストミアのポセイドンの聖域とコリントス市自体に於いてのみ、初期鉄器時代以来中断のない活動の痕跡を認めることができます。まずはイストミアから見てみることにしましょう。神域には、奉納や、共食などの消費行為に関わる何らかの富を示す史料があるかも知れませんが、社会の価値観が長い時間をかけて象徴的

に表現されたものが備わっており、その性質や方向性を垣間見ることができるかも知れません。まず、イストミアの最も主要な活動が各時代を通じて、土地の恵みの消費にあったことは明らかです。このことは主に土器や骨などの遺物群から分かっております。このことは動物などを象った小さな像の主題として牛が中心的な地位を占め続けていたことと共鳴しています（また、ギリシア世界では稀なことですが、古典期以前のコリントスに見られる墓や井戸の遺構にはこの種の小像は発見されておらず、ここでは宗教的な文脈が大きな意味をもっていたという事は強調しておくべきでしょう）。これらの牛形の小さな像が犠牲獣の代用品であったのか、牧畜の象徴であったのか、或いはその両方だったのか、判然としません。骨は、その殆どが羊や山羊のものばかりで、もしもそれらの牛形が、代用品だったのだとすれば、十分代用品としての務めを果たしていたと言えます。もっとも、本物の牛は高価でしたから、神様に対してとは言え、大盤振舞するのにも限界があったのでしょう。早くも原幾何学紋様期には神殿が創建され、しかも、ミュケナイ時代に集落であったものの放棄されていた跡地が利用され、アテナイからペロポネソスへの主要街道の脇に位置し、カト=アルミリヤペラコラ=スカロマといった、LHIII C 期に放棄された幾つかの主要な青銅器時代の墓域の中間地点を占めていることから、コリントス地方における居住や埋葬システムが急激に変化し始めるに当たり、イストミアが新たな地域交流の場を提供する役目を担ったと考えることもできるかも知れません。しかし共食は継続して行われていましたし、その他、とりたてて奉納物のようなものは殆どなく、小さな宝飾品（これはここ以外には少なくとも8世紀半ばまで墓の中でしか発見されておられません）や時折、動物以外を象った小像、例えばアッティカ式、或いはコリントス式の長靴を象ったものが見られる程度です。この長靴を象った小像はおそらく若い女性の奉納品で、婚儀に関わるものだと考えられます。もしそうならば、奉納品から、男女がともに関与していたことが推察されます。勿論同じ機会に、という訳では必ずしもありませんけれど。しかし同時に、当時コリントスが有していた如何なる物質的富も、奉納や埋葬に供される以外には、殆ど他にまわされることがなかったようなのです。

8世紀には幾分状況が変化してきます。この頃には街道沿いの交通量も増加し、またコリントス人自体も異国趣味のものを奉納するようになりました。おそらく新たな奉納品の中で最も重要なものは、750年頃のイストミアに現れる青銅の鼎でしょう。これは8世紀の終わりにかけてコリントスの「神殿の丘」で見つかっている奉納品のうち最初期のものに入ります。コリントスにおける金属製記念物制作が始まるのは、アテナイやアルゴスなどの近隣諸地域に比べ遥かに遅いのですが、クロード=ローリー Claude Rolley は、既に諸地域の貴族たちが奉納や贈与交換に関する慣習を地域を越えて確立していた状況にあって、コリントスにもこうした慣行に参加する必要性が生じた結果、こうした金属製記念物制作が開始されたと示唆しておりまして、魅力的な説だと思われれます。実際、後代、僭主たちが自国よりも他国において非常に豪華な品々を奉納していますが、この時代の鼎奉納がその先駆けであったとも考えたくありません。しかし、イストミアではそれほど長距離の交流を示す遺物は見当たりません。唯一の例外はシチリア若しくは南イタリアの槍先で、700年頃の奉納品と考えられますが、イストミアに辿り着いた経緯も時期も、奉納理由も定かではありません。オリエント産の奉納品は、前古典期の神

殿宝物庫跡の遺物に初めて現れます。これらのオリエント産品に関しては、年代確定の可能なものが僅かしかなく、なかには比較的遅い時代に属するものがあることからみても、470-450年頃の神殿火災よりも遙か前から収集されていたと考える必要もありませんが、(たとえ8、7世紀に作られたオリエント産品であっても奉納は5世紀に行われたということも考えられますので)奉納品の大部分(とりわけ息の長い遺物であるスカラベ)の奉納時期確定は困難と言えます。

コリントス第2の地方神殿ペラコラ出土の考古史料を扱う際にも同様の困難が付きまといまいます。この神殿が港湾部に位置することから、ハンフリー=ペイネ Humfry Payne の著作以降、この神殿の奉納品にみられる豊かさ、多様性は、主に西方との交易から説明されてきました(図11)。実際ペラコラは、コリントス湾の端に位置しますから、交易商たちが特定の商品を残しておくような、市場として、最終目的地でもあったでしょうし、残った積み荷が最終的に辿り着く場所でもあったとも言えます。輸入品の年代が早ければ早いほど、それだけペラコラの目的市場としての位置付けを想定し易くなるのですが、ペラコラの年代が7世紀であるということになれば、アカイア、アイトリア、オリュンピア、そしてイタカなどの出土品と比較して、そうした輸入品の年代も遅く、目的市場としての意味付けはし難くなるでしょう。直接的に比較できるのは、アカイア、アイギオン領にあるアノ=マザラキの神殿です。ここではすでに8世紀末には神殿が創建されておりまして、奉納物の中には神殿創建以前に遡る骨や石の印章、スカラベ、そして、キュプロスの鏃タイプ4などの武具も含まれています(一部が神殿よりも下層から発見されているのです)。

ペラコラの土器群は8世紀半ばにまで遡りますが、個々独立した年代確定ができないような土器群を結び合わせるような、確固とした文脈を見出すことはできません。殆どの遺物について8世紀と年代が推定されているのは、主として、ペイネ言うところの「幾何学紋様期の一括遺物」の中で発見されているからでありまして、その下限年代は、ペイネ自身がこの「一括遺物」のものとして想定した土器の年代に基づいて、凡そ720年頃と位置付けられています。実際もっと遅い時期のものも含まれてはいるのですけれど。しかし、ブランシェ=メナディエが強調しているように、これは、考古学的見地から言って如何なる意味においても一括遺物ではあり得ず、すなわち、様々な別個のコンテクストに由来する遺物が混在しているのでありまして、こうしたものと結び付けて年代確定をすることはできないのです。これは深刻な問題をもたらします。と言いますのは、そこに納められたと考えられてきたものが、しばしば長期に亘って確認できる、息の長い物品だからです。例えば、イタリアの骨と琥珀の留め針は、8世紀、もしくは7世紀に属するものようです(8世紀にピテクサイに於いて製作され始め、7世紀にはシュラクサイの墓で見つかっています)。しかしその他のタイプの留め針、エジプト風のスカラベやその類似品は遙かに長い間確認できます。コリントスでは幾何学紋様期IIの墓に唯一のスカラベが発見されています。その後、7世紀も終わりに近付くまで空白期がありますし、コリントスの墓から出土した唯一の骨と琥珀の留め針は6世紀、中期コリントス様式期のものと考えられます。8世紀後半にコリントスに於いて墓に副葬品を納める習慣が消滅したことによって、考古学上、年代決定をする為の重要な手立ては失われてしまった訳ですが、ともかくその直前の中期幾何学紋様期IIに於いて墓域に富と呼べる

ようなものが比較的少ないことは興味深いことでしょう。ヘラ神殿の創建とコリントスの西方拡大の時期が一致しているのかも知れませんが、このことはそれまでであれば副葬品にしていたようなものが、かなり神殿に対する奉納物の方へまわされていったことに現れているのかも知れません。この点は推測に過ぎませんが、また初期のものはそもそもごく少数しかなく、7世紀という、コリントス湾岸の東方に位置する他の遺構と比較してずいぶん遅い時期に、そして植民活動が開始されてずいぶん経ってからようやく、そうした輸入品が相当数入ってくるようになったとも言えるかも知れません。

しかし殊に8世紀に関していえば、コリントスの富を豪華な、或いは移動可能な物品の中に見い出そうというのは間違いなのでしょう。コリントスの神殿ネットワークが飛躍的に拡大した結果、それぞれ膨大な資金投入の対象となったのは、その神殿で執り行われる儀礼に関わる食事や飲酒であったと言えます。もともと前古典期の終わりとは比べ、祭祀や儀礼に殊更他地域からの影響を示唆するようなものはありませんけれども。田園部のソリギアには、8世紀終わりに設立されたと考えられる、おそらく祭壇と囲壁 *peribolos* だけの簡素な構造からなる神殿があります(図12)。これは初期コリントスを支配していたドーリス人たちの上陸地点と考えられており、都市の歴史や地誌に対する認識がこの時期に新たにどのようなものに変化したのかを探る重要な手立てと言えるでしょう。その後もコリントスでは、自国の神話-歴史上の重要事件を記念する儀礼を催行する目的で、その用途の施設を建設する流れが続いていきます(「聖なる泉」付近のコテト神殿がその2番目の例だと言えるでしょうし、5世紀の競技場がこれに続く例と言えるでしょう)。コリントス市自体においては、クリストファ=ファフによれば凡そ750年頃、アクロコリントス山腹、後にデメテルとコレの神域となる空間に神殿が建築され始めました。おそらく既に長く続いている重要な集落の内部に位置するものと考えられます(図13)。ここから出土する遺物は主に土器、それもイストミアで見られたような食事用のものです。ファフの同定はイストミアに類似品のある33の遺物に依拠している訳ですが、これには小さな留め針のような、副葬品としては極めて稀なものも含まれています。ファフは、埋土やゴミ捨て場、井戸といった、儀礼とは離れた場面に於いて見い出される土器以外の遺物の数が顕著に少ないと主張しており、この意見は正鵠を射ていると思われまふ。実際コリントス人は金属の扱いに殊の外意を用いていたようです(イストミアでは金属を再利用していたことが窺われます)。金属は儀礼関係の文脈から離れることはまずなく、廃棄されることも殆どありませんでした。おそらく、続く2世紀の間、デメテルとコレの神殿がこの地域の最も重要な宗教施設となっていました。ここにある壮麗で大規模な宴会場で政治に携わる者たちが、晚餐を開いていたのです。宴会場は、6世紀以降、聖域の相当の領域を占めるようになります。またこの神域に数多くのテラコッタ像を立てることにより、エリートたちが自己顕示を為すようになっていきました。6世紀末から5世紀始めにかけてここで為された消費活動の規模の大きさは近年の発掘に於いて調査されている食料遺物の幅広さからも証明されています。

8世紀に戻りまして、コリントスが新たに物理的にも社会的にも中心となっていくことを示す最も顕著な事例は、「神殿の丘」における奉納の始まりです(図14)。先程見た鼎を含む、8世紀末の奉納品が、6世紀の神殿火災の後、この丘の北面に位置する道を埋めていたようです。この立地には注目すべきです。この丘に位置する、レケオン溪谷北

面を形成する石灰石の尾根道（ローマ時代に縮小されますが）は、おそらく主要居住区を結ぶ位置にあり、アクロコリントスまで通じており、ミロス=ヘリオトゥから続いています。この道は非常に古いもので、おそらく埋葬地の傍に形成されております。僅かに発掘されている北部墓域の一部がこれと境を接しており（ここでも墓の間を埋め立てるのに8世紀以前の土器が用いられております）、また更に個別の墓も見つかっています（そしてこの為には、私は、イアン=モリス Ian Morris とは異なり、北部墓域が8世紀の新しい「市民」墓域であるとは考え難いように思っています）。このように「神殿の丘」は台頭する都市に於いて地理的にも重要な位置を占めていた訳です：ギリシア時代のアゴラの位置は確定できませんが、もしも北側に位置していたとすれば、アクロコリントスの古い居住区から下がってきて、この地域に対する比重が象徴的に高まってきたという考えを更に補強してくれるでしょう。アポロン神殿建設は凡そ680年頃に当たり、コリントス地方では最初のものと言えます。ここではブランシェ=メナディエの説に従います。ペイネはペラコラの第1ヘラ神殿を早いものと考えていますが、彼が示した地層が正確であるとするならば、むしろきっと幾何学紋様期ではなくヘラディック初期の建築でありますし、またいずれにせよ彼がヘラ神殿の再建や機能について提示しているものは相当程度推論に拠っているのです。コリントスの神殿建設は、近隣の共同体、例えばアノ=マザラキ、テゲア、アシネなどと比べて始まりが遅いと言えます。神殿建築に石材が利用されたことに関しては、既に墓石や家屋建築用石材が利用されていることや、魚卵状石灰石が容易に利用できることを考えれば、驚くことではありません。新たな点は、神格を住まわせ、聖財を収蔵し、建設用地を奉納する、という考え方です。この最後の点は、ペラコラに奉納された建築物の模型にも現れています。但し、この模型が第1ヘラ神殿を模したものであるとする考えを括弧に括れば、時代順の決定は流動的になりますが。（ペラコラ、アノ=マザラキ、アルゴスのヘラ神殿、そして今御覧のピテクサイのアクロポリス、各地から出土している建築模型の時代順を確定することは、興味深い試みですが、解答不能と言えるでしょう）。

これまでコリントスそのものの集落については多くを語らずに来た訳ですが、これまで描いてきたイメージを補完する重要な証拠として、最後を飾るに相応しいというだけではない、それなりの理由があります。集落に関して、まだまだ重要な史料に事欠いているとは言え、道路や水の周囲に拡大集落、集落群が形成されていく様子については、次第と精緻に把握することができるようになってきました。初期原コリントス様式時代以前に家屋建築が見られないのは、おそらく偶然の産物でしょう（少なくとも、各々孤立した初期の建築物群とテラス=ウォールは見つかっています）。残念ながらこのことは同時に比較の為の明確な家屋群がないことをも意味しています。しかしながら墓や井戸の方から面白い事実が分かります。これまで強調してきたように、近隣諸地域、殊にアテナイとは対照的に、コリントスの家庭用井戸からはほぼ土器しか見つかりません。動物などを象った小像もありませんし、事実上金属も皆無です。墓に於いてもまた、キース=ディッキーの研究から明らかなように、性差や身分格差を示すと思われる副葬品が確固としたパターンを示すことはありません。墓に関わる物品について陶器以外のものの程度が概して低かったことは、一部にはこうしたところから説明がつくのかも知れません。今日見つかっているのは、ほぼ青銅や鉄製の装飾品のみで、しかも埋葬用の布地

を留める為に用いられたピンの他には、ごく稀に僅か2、3個の副葬品（例えば、指輪や留め針、螺旋髪飾り）が見られるのみなのです。先程述べました唯一例外的なスカラベを除きまして、輸入品の副葬はなく、素材を輸入することはありませんでした。僅かに、8世紀前半、副葬習慣が放棄される直前に、細工が入念となった形跡が見られ、副葬品も幾らかは増加し、青銅製のフィアレや非実用的な50cmにもなるものもある「地位を表す」留め針も時折見られるようになります。現在ベルリン古美術博物館 Berlin Antiquarium に所蔵されている8世紀末及び7世紀初頭の黄金製の帯状遺物は例外と言えるかもしれません。これは1882年に初めて公表された際、コリントス近郊の墓から発見されたと報告されました。もしもこれが本当に事実であれば、それまでの慣習から著しく離脱したことを示しているのかも知れませんが、出土地の情報は、これを博物館に売却した古美術商によるもので、扱いには注意が必要です。発掘に基づいて蓄積されているより確かな情報を基にすれば、むしろ地位を顕示するような性格は弱く、次第に副葬習慣が廃れていったにせよ、それもそれ程大きな文化の喪失と言える程のことではありませんでした。しかしここでも私たちはコリントスの富を探して、間違った場所に来てしまったのかも知れませんが、750年以前には、ギリシアの墓の形態が、単なる土坑墓から、石棺、堅穴墓まで多様であったことを考えれば、コリントス人は、副葬品よりもむしろ墓の構造そのものの方にむしろ資金を投入しようと考えていたのかも知れません。こうした視点で見ると、念入りに作られた、おそらく費用も嵩んだであろう石棺が、排他的ではないにせよ、主要な墓形態となっていること、さらにカリスマタ、すなわち家庭の竈の灰、燃え残りを納める儀礼的行為も考え併せると、この件についてのコリントス人の志向の一致具合が極めて、例外的な程に高かったということが分かります。情報を総合的に見ていきますと、コリントスに於いても周辺他地域同様に富や地位の顕示がなかった訳ではなく、隣接諸地域と比べ、その方法が同一でなかったのであり、或いは少なくとも同じ媒体を通して提示されなかったのです。8世紀から6世紀に亘って隆盛を極める豪華な墓や高価な金属器などを通して、初期鉄器時代に貴族たちが自己顕示を発達させていったという一般的なイメージは、コリントスでは単純にはあてはまらないのです。

誤解を生みがちな比較基準から離れれば、初期コリントスが貧困であったとか、平等主義であったとか、孤立していたといったことは言えないのは明らかです。8世紀から7世紀始めにかけてコリントス人は実際にある種の活動に資金を投下しておりました。土地の恵みを自由に享受しておりましたし、好みに応じて美術的革新を採用したり、或いは無視したりすることが十分にできたのです。しかし彼等の基準やルールは独自のものでした。同様に、コリントス人の経済活動についてこれまで過度に海上交易の面を強調し、あまつさえコリントスを初期ギリシアの唯一の海上覇権国家とすら捉えてきたことには修正を加えねばならぬにせよ、必ずしもコリントスが、地中海、イオニア海、アドリア海を行き交う人やモノの複雑な交流に深くは関わっていなかったということにはなりません。商品を獲得し、契約を交わし、単独或いは共同でヴェンチャーに乗り出す機会がごく身近に豊富にありました。ただもう少しだけ丁寧に史料を見ていく必要があると思います。しかしそうすれば、コリントス内外からもたらされる史料が提示している様々なイメージが、より整合的なものとなることでしょう。結果として現れたコリント

スの富は、レフカンディやエレクトリアのように貴金属や異国趣味の輸入品とは異なり、すぐに目につくようなものではないかも知れません。しかし、それが事実だったのです。

本日はまず、古典期後期のコリントスの私生活に関わる快適さについての興味深いイメージを扱い、先例のない軍事的外交的逆境によって公的に富の顕示する力を失った結果、こうした私的快適さへと力点を移していったのだろうか、それともコリントス人の価値観の核となる部分が再び現れたに過ぎないのだろうか、と修辞疑問を呈示いたしました。初期鉄器時代及び前古典期の史料が後者の見方を支持していることを、今回示すことができたと思います。そして彼等の同時代人たちが大きな危機を経験したことと並べて考えてみれば、8世紀のコリントス人が豪華な物質文化を顕示するよりも、お腹一杯の食事とお酒の供される盛大なお祭りを催すことの方を好んでいた訳ですから、良い判断をしていたものだと感じずにはおれません。

《参考文献》

- Anderson-Stojanovic, V.R. (2001) 'The cult of Demeter and Kore at the Isthmus of Corinth', in R. Hägg (ed.) *Peloponnesian Sanctuaries and Cults. Proceedings of the 9th International Symposium at the Swedish Institute at Athens, 11-13 June 1994*, Stockholm: Paul Åström: 75-83
- Barrett, W.S. (1978). 'The Oligaihidai and their Victories (Pindar, Olympian 13; SLG 339, 340)', in R. Dawe, J. Digge, and P.E. Easterling (eds), *Dionysiaca. Nine Studies in Greek Poetry by Former Pupils Presented to Sir Denys Page on his Seventieth Birthday*, 1-20. Cambridge: CUP.
- Bentz, J. (1998). 'Appendix A. The Date of the Destruction of the Archaic Temple based on Ceramic Evidence', in Gebhard 1998: 110-113.
- Blegen, C., Palmer, H., and Young, R. (1964). *Corinth XIII. The North Cemetery*. Princeton: ASCSA.
- Boedeker, D. (1995). 'Simonides on Plataea: Narrative Elegy, Mythotic History'. *ZPE* 107: 217-229.
- Bookidis, N. (1990). 'Ritual Dining in the Sanctuary of Demeter and Kore at Corinth: Some Questions', in O. Murray (ed.), *Sympotica. A Symposium on the Symposion, 86-94*. Oxford: OUP.
- Bookidis, N. (1993). 'Ritual Dining at Corinth', in N. Marinatos and R. Hägg (eds), *Greek Sanctuaries. New Approaches*, 45-61. London: Routledge.
- Bookidis, N. (2000). 'Corinthian Terracotta Sculpture and the Temple of Apollo'. *Hesperia* 69: 381-452.
- Bookidis, N., and Fisher, J. (1972). 'The Sanctuary of Demeter and Kore on Acrocorinth. Preliminary Report IV: 1969-1970'. *Hesperia* 41: 283-331.
- Bookidis, N., Hansen, J., Snyder, L., and Goldberg, P. (1999). 'Dining in the Sanctuary of Demeter and Kore at Corinth'. *Hesperia* 68: 1-54.
- Bookidis, N., and Stroud, R. (1997). *Corinth XVIII, iii. The Sanctuary of Demeter and Kore. Topography and Architecture*. Princeton: ASCSA.
- Broncer, O. (1942). 'Hero Cults in the Corinthian Agora'. *Hesperia* 11: 128-161.
- Broncer, O. (1954). *Corinth I, iv. The South Stoa and its Roman Successor*. Princeton: ASCSA.
- Broncer, O. (1958). 'Excavations at Isthmia, Third Campaign, 1955-1956'. *Hesperia* 27: 1-37.
- Broncer, O. (1973). *Isthmia II. Topography and Architecture*. Princeton: ASCSA.
- Bynum, M.R. (1995). *Studies in the Topography of the Southern Corinthia*. PhD diss., University of California at Berkeley.

- Corinto e l'Occidente. Atti del XXXIV Convegno di Studi sulla Magna Grecia, Taranto 7-11 ottobre 1994, Taranto: Istituto per la Storia e l'Archeologia della Magna Grecia, 1995. (see especially papers by d'Andria and Bookidis).
- Dickey, K. (1992). *Corinthian Burial Customs, ca.1100 to 550 BC*. PhD diss., Bryn Mawr College.
- Freitag, K. (2000). *Der Golf von Korinth. Historisch-topographische Untersuchungen von der Archaik bis in das 1. Jh. V. Chr.* Munich: Tuduv.
- Gebhard, E. (1992). 'The Early Stadium at Olympia and the Founding of the Isthmian Games', in W. Coulson and H. Kyrieleis (eds), *Proceedings of an International Symposium on the Olympic Games, 73-79*. Athens: Braggioti/DAI.
- Gebhard, E. (1998). 'Small Dedications in the Archaic Temple of Poseidon at Isthmia', in R. Hägg (ed.), *Ancient Greek Cult Practice from the Archaeological Evidence, 91-115*. Stockholm: Åström.
- Gebhard, E. (2002a). 'The Beginnings of Panhellenic Games at the Isthmus', in Kyrieleis 2002a: 221-237.
- Gebhard, E. (2002b). 'Caves and Cults at the Isthmian Sanctuary of Poseidon', in R. Hägg (ed.), *Peloponnesian Sanctuaries and Cults, 63-74*. Stockholm: Åström.
- Gebhard, E., and Dickie, M. (1999). 'Melikertes-Palaimon, Hero of the Isthmian Games', in R. Hägg (ed.), *Ancient Greek Hero Cult, 159-165*. Stockholm: Åström.
- Gebhard, E., and Hemans, F. (1992). 'University of Chicago Excavations at Isthmia, 1989: I'. *Hesperia* 61: 1-77.
- Gebhard, E., and Hemans, F. (1998). 'University of Chicago Excavations at Isthmia, 1989: II'. *Hesperia* 67: 1-63.
- Gebhard, E., Hemans, F., and Hayes, J. (1998). 'University of Chicago Excavations at Isthmia, 1989: III'. *Hesperia* 67: 405-456.
- Greco, E. (ed.) (2002) *Gli Achei e l'Identità etnica degli Achei d'Occidente*, Paestum: Fondazione Paestum.
- Hayward, C.L. (1996) 'High-resolution provenance determination of construction-stone: a preliminary study of Corinthian oolitic limestone quarries at Examilia', *Geoarchaeology* 11: 215-34.
- Herbert, S. (1986). 'The Torch-Race at Corinth', in M. del Chiaro (ed.), *Corinthiaca. Studies in Honor of Darrell A. Amyx, 29-35*. Columbia: University of Missouri Press.
- Jackson, A. (2000). 'Argos' Victory over Corinth'. *ZPE* 132: 295-311.
- Lolos, G.J. (1998). *Studies in the Topography of Sikyonia*. PhD diss., University of California at Berkeley.
- Lorandou-Papantoniou, R. (1999) *ΣΟΛΥΓΕΙΑ. Η Ανασκαφή του 1957-1958*, Athens: Archaeological Society of Athens.
- Marchand, J. C. (2002). *Well-built Kleonai: a History of the Peloponnesian City Based on a Survey of the Visible Remains and a Study of the Literary and Epigraphic Sources*. PhD diss. University of California, Berkeley.
- Menadier, B. (1995). *The Sixth Century BC Temple and the Sanctuary and Cult of Hera Akraia, Perachora*. PhD diss., University of Cincinnati.
- Morgan, C. (1999). *Isthmia VIII. The Late Bronze Age Settlement and Early Iron Age Sanctuary*. Princeton: ASCSA.
- Morgan C. (2001) 'Figurative iconography from Corinth, Ithaka and Pithekoussai: Actos 600 reconsidered', *BSA* 96: 195-227.
- Morgan, C. (2002). 'The Origins of the Isthmian Festival', in Kyrieleis 2002a: 251-271.
- Munn, M.L. Zimmerman (1984). *Corinthian Trade with the West in the Classical Period*. PhD diss., Bryn Mawr College.
- Pemberton, E.G. (1989). *Corinth XVIII, i. The Sanctuary of Demeter and Kore. The Greek Pottery*. Princeton: ASCSA.
- Pemberton, E.G. (1996). 'Wealthy Corinth: the Archaeological Evidence for Cult Investment at Greek Corinth', in M. Dillon (ed.), *Religion in the Ancient World. New Themes and Approaches, 353-366*. Amsterdam: Hakkert.

- Pemberton, E.G. (1999). 'Wealthy Corinth; the Archaeology of a Classical City'. Proceedings 1998 of the Australian Academy of the Humanities, Canberra: 138-165.
- Pemberton, E.G. (2000a). 'Wine, Women and Song: Gender Roles in Corinthian Cult'. *Kernos* 13: 85-106.
- Pfaff, C. (1999). 'The Early Iron Age Pottery from the Sanctuary of Demeter and Kore'. *Hesperia* 68: 55-134.
- Ridgway, B.S. (1981). 'Sculpture from Corinth'. *Hesperia* 50: 422-448.
- Robinson, H. (1976) 'Temple Hill, Corinth', in U. Jantzen (ed.) *Neue Forschungen in griechischen Heiligtümern*, Tübingen: Wasmuth: 239-60.
- Salvator, L. (1876) *Eine Spazierfahrt im Golfe von Korinth*, Prague: Mercy.
- Steiner, A. (1992). 'Pottery and Cult in Corinth: Oil and Water at the Sacred Spring'. *Hesperia* 62: 385-408.
- Stroud, R. (1992-1998). 'A Corinthian Epitaph'. *HOROS* 10-12: 239-243.
- Stroud, R. (1994). 'Thucydides and Corinth'. *Chiron* 24: 267-304.
- Sturgeon, M. (1987). *Isthmia IV. Sculpture I: 1952-1967*. Princeton: ASCSA.
- Symeonoglou, N.E.W. (2002) *The Early Iron Age Pottery and Development of the Sanctuary at Actos, Ithaka (Greece)*, PhD diss. Washington University.
- Tomlinson, R.A. (1969). 'Perachora: the Remains outside the Two Sanctuaries'. *BSA* 64: 155-258.
- Tomlinson, R.A. (1990). 'The Chronology of the Perachora hestiatorion and its Significance', in O. Murray (ed.), *Symptica. A Symposium on the Symposium*, 95-101. Oxford: OUP.
- Wachter, R. (2001). *Non-Attic Greek Vase Inscriptions*. Oxford: OUP.
- Weinberg, S. (1957). 'Terracotta Sculpture at Corinth'. *Hesperia* 26: 289-319.
- Will, E. (1955). *Korinthiaka*. Paris: Boccard.
- Williams, C.K. II. (1969). 'Excavations at Corinth, 1968'. *Hesperia* 38: 36-63.
- Williams, C.K. II. (1970). 'Corinth, 1969: Forum Area'. *Hesperia* 39: 1-39.
- Williams, C.K. II. (1978). *Pre-Roman Cults in the Area of the Forum of Ancient Corinth*. PhD diss. University of Pennsylvania.
- Williams, C.K. and Bookidis, N. (eds), *Corinth XX. Corinth: the Centenary, 1896-1996: 247-259*. Princeton: ASCSA.
- Williams, C.K. II, and Fisher, J. (1976). 'Corinth, 1975: Forum Southwest'. *Hesperia* 45: 99-162.
- Williams, C.K. II, and Russell, P. (1981). 'Corinth: Excavations of 1980'. *Hesperia* 50: 1-44.
- Wiseman, J. (1963). 'A Trans-Isthmian Fortification Wall. Notes on Hellenistic Military Operations in the Corinthia'. *Hesperia* 32: 248-275.
- Wiseman, J. (1967). 'Excavations at Corinth. The Gymnasium Area, 1966'. *Hesperia* 36: 402-428.
- Wiseman, J. (1978). *The Land of the Ancient Corinthians*. Göteborg: Åström.



図 1. ローマ時代のフォルム西端から望むアクロコリントス (写真: 筆者)

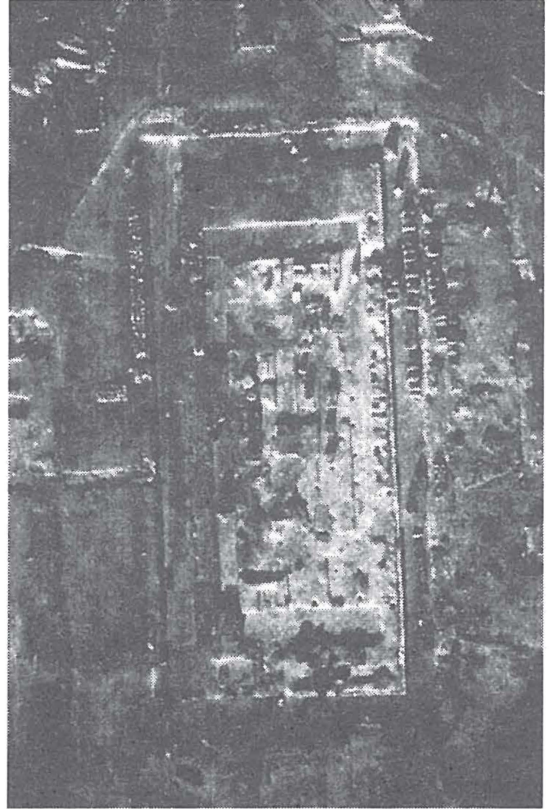


図 3. イストミアのポセイドン神殿 (写真: シカゴ大学イストミア発掘隊)

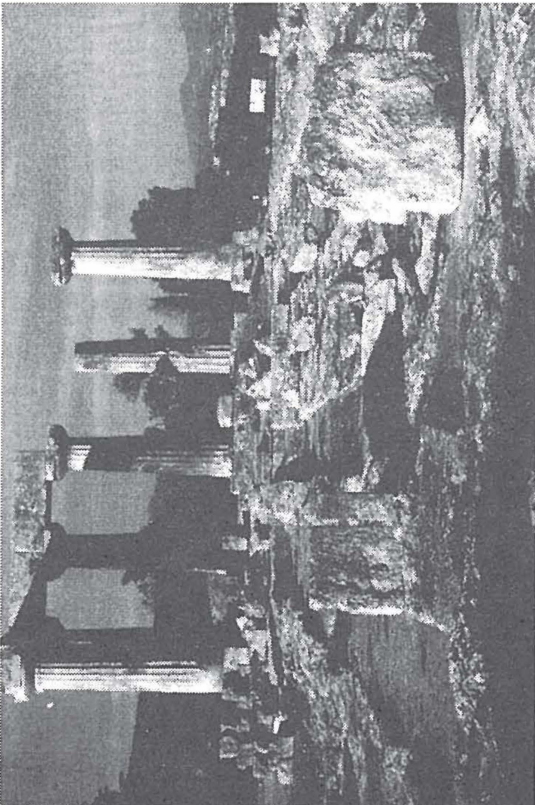


図 2. コリントスのアポロン神殿 (写真: ヘイワード C.L. Hayward)

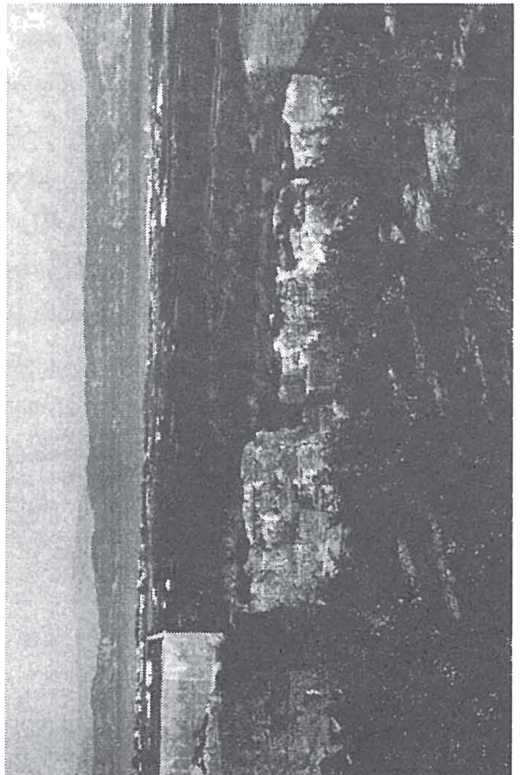


図 4. コリントス地方中央部の石切り場 (写真: ヘイワード)

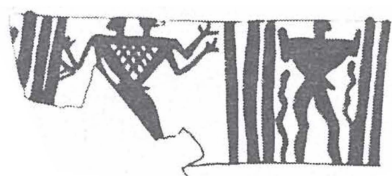
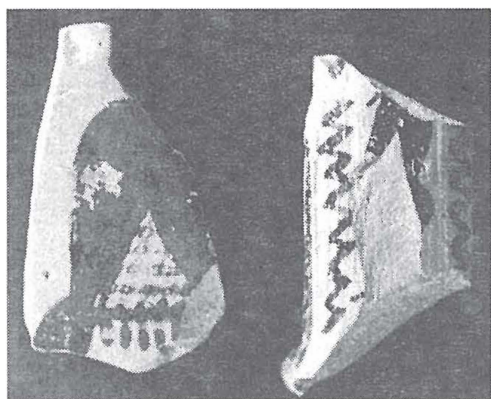


図 5. Isthmia VIII, cats. 372 (左上)、371 (右上)、Corinth C66 216 (下)
(写真及び実測図：筆者)

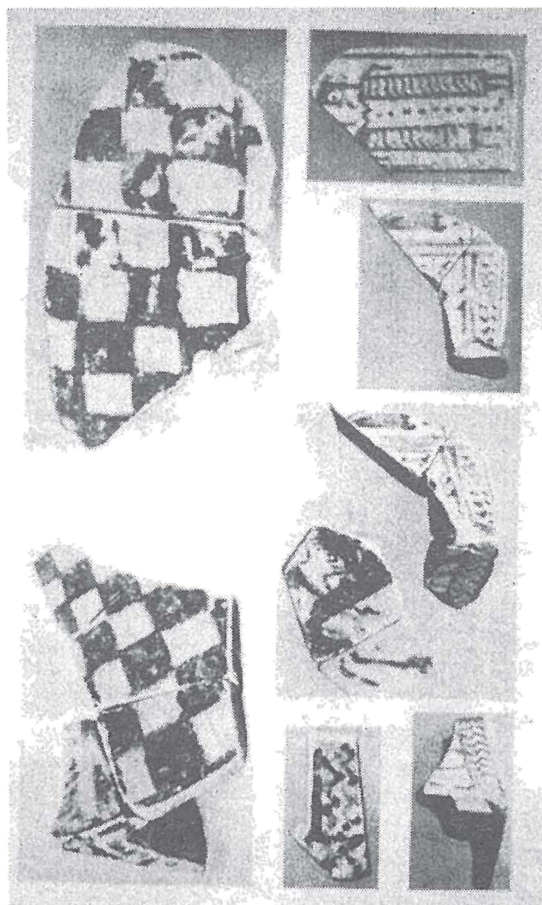


図 7. エトス600 (写真：在アテネ英国研究所)

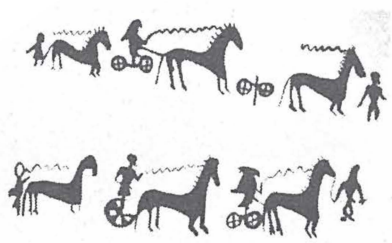


図 6. ヒテクサイ、サン=モンターノ、第 946 墓から出土のカンタロス
(写真及び実測図：筆者)

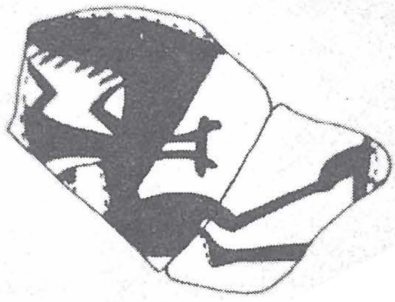
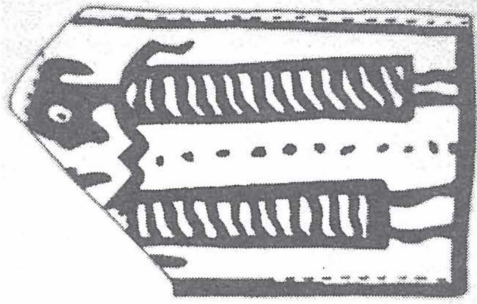


図 8. エトス 600: 騎手像 (下)、前面の男性像 (上) (実測図: 筆者)

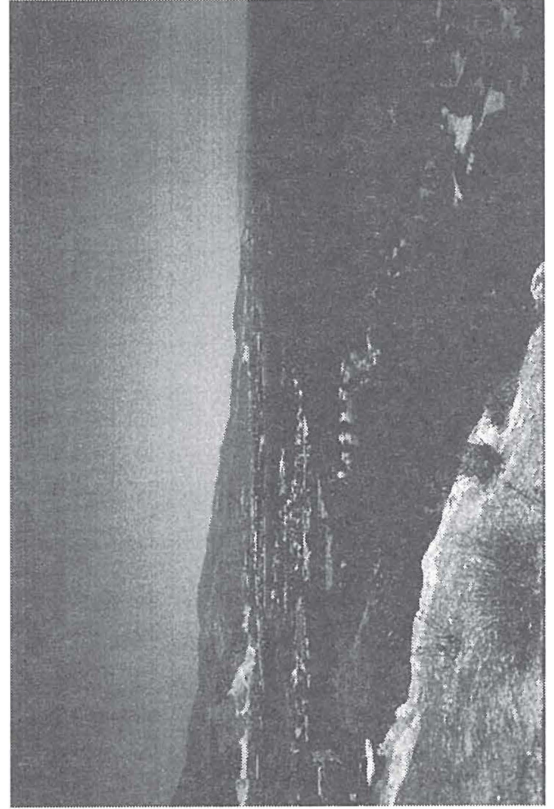


図 9. サロニカ湾 (写真: 筆者)

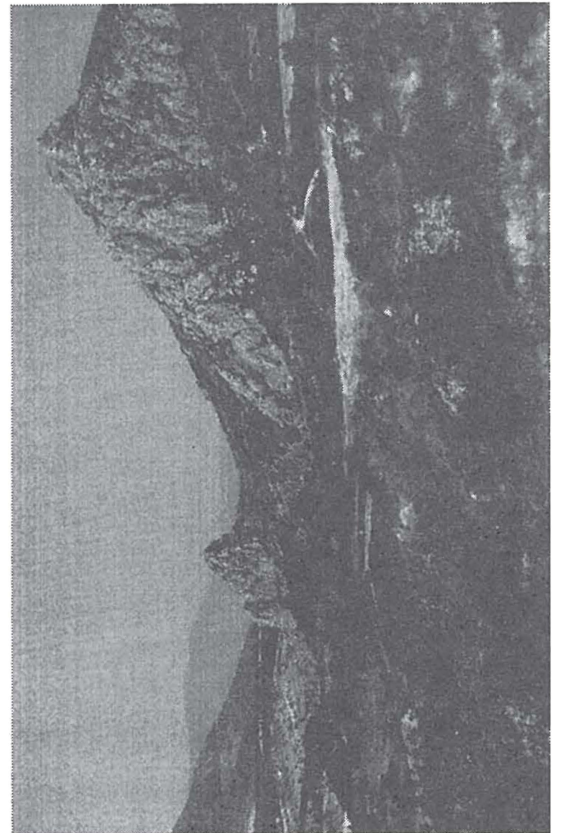


図 10. アクロコリントスから望むペンテスクフィア (写真: 筆者)

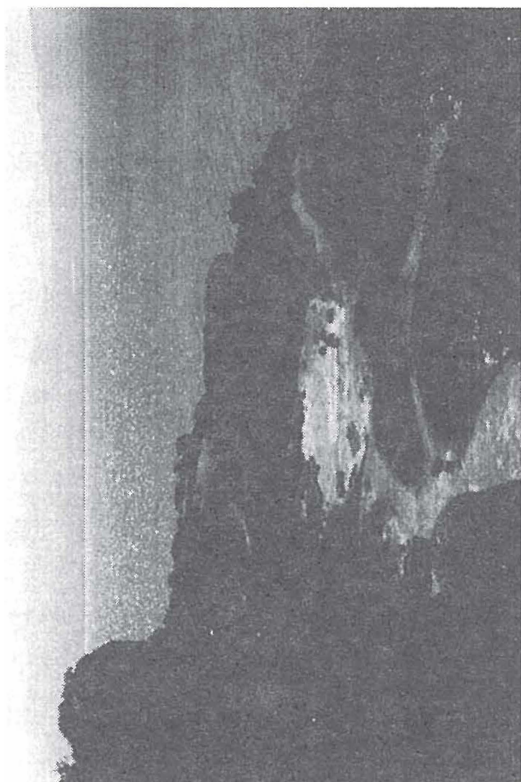


図 11. ベラコラのヘラ神殿 (写真:ヘイワード)

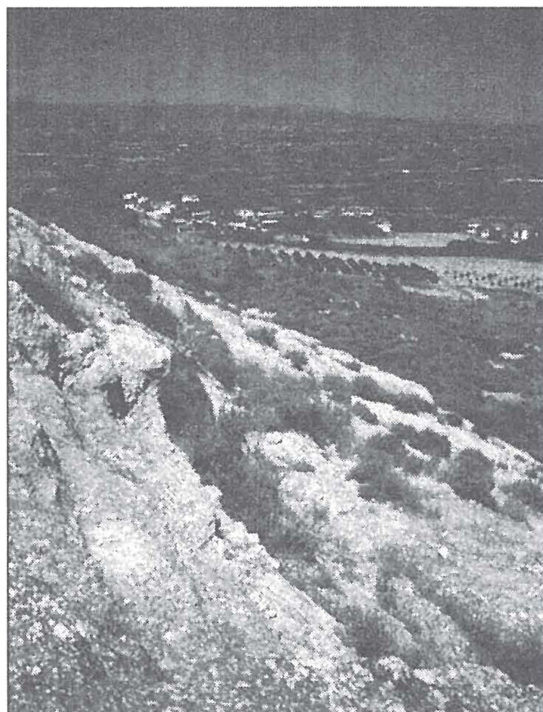


図 13. アクロコリントス、デメテルとコレの神域 (写真:筆者)

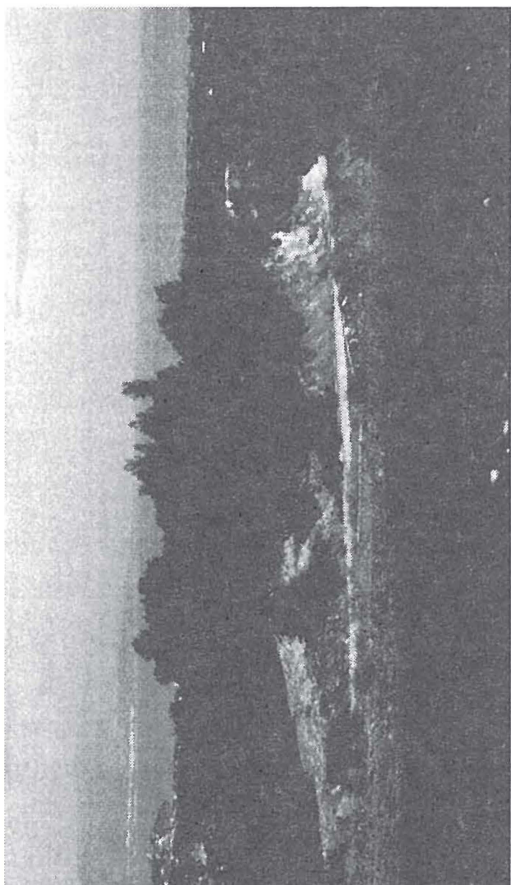


図 12. ソリギア (写真:筆者)

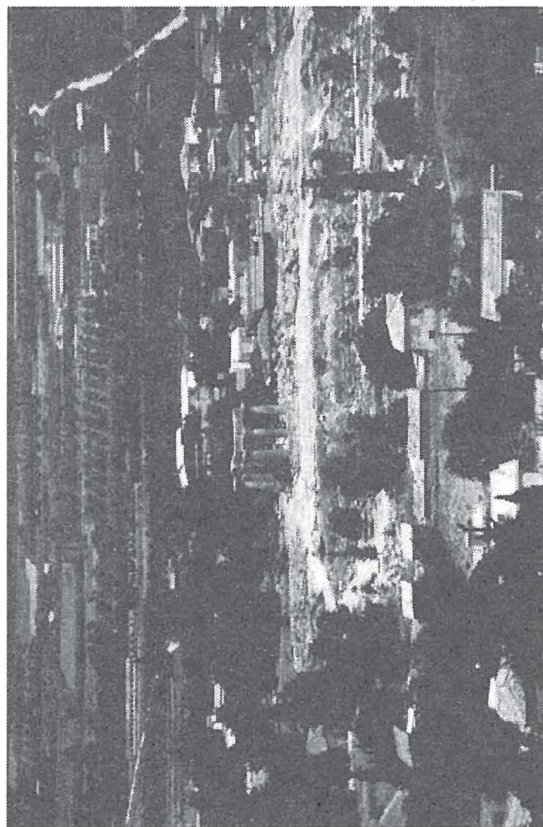


図 14. アクロコリントスから望む「神殿の丘」 (写真:筆者)